

一歩高いところから
人生と仕事を考える

鴻嶋塾

経済ジャーナリスト 松崎隆司

単なる就職セミナーではない、
自分自身を見つめ直す場所

二月九日、東京・日本橋にある日本IBMの箱崎本社の一角で、セミナーが行われていた。

主催するのは「鴻嶋塾」。一時から二〇時までの勉強会に大学一年生から四年生、社会人のメンター助言者などを含めると二〇〇人以上が集まった。今回のテーマは、一、二年生には講演やロールプレイングなど具体的な就職支援の勉強会が行われた。

代表者の上田圭祐は冒頭、集まった一、二年生たちに会の趣旨について次のように説明した。

「この会は、毎年、日本を代表するような企業に多数就職者を出しています。しかし就職のためのセミナーではありません。将来の日本を背負って立つようリーダーを育てるための勉強会です。就職というのは学生にと

って自分自身を見つめ直すいい機会です。だから私たちも自分を見直すお手伝いをしていきます」

日本IBMに勤める傍ら、上田が活動を開始したのは二〇〇八年六月からだ。就活中の学生たちに、仕事の選び方や、生き方のような話を何気なく話していたうちに、「それを聞いた学生さんが、自分だけでなくほかの友達や後輩たちにもその話を聞かせてやってほしいといわれたのがきっかけでした」と振り返る。

それが嵩じて、上田は社会と学生との架け橋となり、志の高い学生を育て、グローバルに活躍する人材を社会に輩出することで、社会に貢献したいと思うようになり、勉強会を開始したという。

入塾の条件はなく、「来るものは拒まず」。しかし、上田の薫陶を受けた学生や卒業生たちから口コミや紹介で次々に学生が集まり、スタート当初は六〇人だったものが、翌年には二〇〇人、三年目で二〇〇人と倍々ゲームで広がり、二〇一二年には三〇〇人を超えた。そのため組織としての体を整える必要に迫られて二〇一二年一月二日、正式に特定非営利活動法人「鴻嶋塾」として本格的に組織化した。

塾名の「鴻嶋」とは、中国の「十八史略」

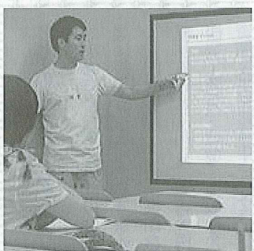
「燕雀いずくんぞ、鴻鶴の志を知らんや」からとった。

物事を鳥瞰することで、グローバルで活躍する人材を輩出したいと思っています」と上田はいう。

究極的な目標は……
何もなくても何かを

塾の主なプログラムは大きく分けて二つ。ひとつは前述の就職支援勉強会だ。これは大学三、四年生を対象に就職活動に向けた講義や、ロールプレイング、社会人との交流で実際に働いている人たちの意見交換をする機会などを提供するもので、鴻嶋塾の卒業生や就職して一〇年程度の各界の社会人ボランティアなど二〇〜四〇人が一〇〇人近い学生たちを直接指導する。

ここでは就職セミナーなどでは聞けないような各界の第一線で活躍する社会人の仕事観や人柄観などの講演や自己PRの仕方、エン



上田圭祐 鴻嶋塾代表

トリーシートの書き方などの就職ノウハウ講座、模擬面接、オンラインでのエントリーシート指導な

「燕雀いずくんぞ、鴻鶴の志を知らんや」からとった。

「燕(ツバメ)や雀(スズメ)のような小さな鳥は低いところしか飛ぶことができないため、つまり身の回りしか見えない。が、鴻鶴つまり大きな渡り鳥になれば海や山を越え、高いところから世界を見ることができる。一歩高い視点から、世の中を俯瞰して見てみようということで、塾に参加する学生にも、目の前の就職活動に執着するのではなく、鴻嶋のように一歩高いところから「自分の人生、働く」ということをきちんと考え、大きな視野で物事に取り組んでほしいという想いを込めて、鴻嶋塾と名づけることにしたのです」という。

その名の通り、集まってくれた学生たちには、有意義な社会人生活を送ってもらえるように、目の前のものに執着するのではなく、物事を「大局」で捉えて考えるよう指導しているという。

「就職活動という短期のイベントに執着するのではなく、四年間というスパンで学生生活をプランニングし、Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Act(改善)の四段階を繰り返すPDCAサイクルを支援するのが、鴻嶋塾の考えであり、将来、社会に出てからも、常に一つ上の視点か

農業体験などをしてもらいました」という。こうした経験を経験で終わらせないのがこの勉強会の特徴だ。その後、体験した学生にその業界や会社、地域の課題を見つけて、その対策を考えさせる。

「香川県のグループは過疎化の問題について取り組み、ボランティアによる地域支援などをその後実践しています。また、徳島のグループは地場産業である藍に注目しました。藍は価格の安い中国産が大量に出回り国内産が非常に厳しい局面に立たされているのですが、藍のデトックス効果などに着目し、学生が藍を使ったキーキを開発し、田園調布のキーキ屋さんなどで販売しました」と、最後まで手を緩めない。

このほかにも先般の衆議院選挙で、立候補者の選挙活動にボランティアとして参加し、生の政治を体験させている。

しかし、ここがみぞなのだろう。大いに期待したいのは「最終的にはゼロから何かを作れるような人材、自分で考えてできるような人材を育成したい」と思っています(上田)とこぼす。

大学生だけでなく、高校生にも裾野を広げていくという。日本を背負って立つ若者がこの塾の卒業生から二〇年、二〇年先にどれたけ誕生するのか、楽しみない私塾だ。